

「伊勢」と日本スタディプログラム 最終レポート

伊勢との縁

○神道について

私は、伊勢市に来る前に伊勢市や伊勢の神宮に関すること、ひと、ものに触れることは少なかった。そこで、中国においてどのような研究があるのか事前に調べた。「古事記」、「伊勢物語」、「式年遷宮」、「日本神道の発展と形成」、「神社の建築の構造形式と文化」、「礼文文化」、「神伝説・民族 信仰」、「伊勢神宮と出雲大社からみた神道文化」等々の文献が見つかった。私に対してこれらのテーマは全く新しい領域である。どうしよう！伊勢市に行くのに、その地域や神道に関する知識が少なすぎる。中国で受けた義務教育や歴史教育の中では、日中戦争のことが中心で、「神道」というテーマはなかった。神宮、大社や神社に関する語彙自体は、私の幼少期や青年期はこれらがタブーのように、誰も伝題にしていなかった。そこで、私は自問自答した。中国は、日本にお寺や仏教の影響を与えられ、儒教と道教、禅と茶道文化の故郷であり、これらの説統文化は人々の日常生活のさまざまな面で馴染みが深い。例えば、旧正月にお寺に参り、あの世で使う紙幣や紙服を燃やして先祖に送ることや、家庭で祖先の位牌を設けて神として祭っている様子もよくみられる。子孫として祖先の霊に対して、加護祝福を祈願することであり、感謝を捧げることであり、祖先に対する敬愛の情を表し、親孝行の念をこころに記している信仰となる。中国には、「身体髪膚之を父母に受く」という諺があり、自己を愛することは父母を愛することであり、祖父母を愛することであり、祖先を愛することである。そして、このような信仰は日本の神道との共通性があり、祖先崇拜と一致していると私は理解した。

○座学と実学について

三週間の「伊勢」と日本スタディプログラムに参加できたことは、伊勢のこと、もの、ひとについて深く理解できた。午前中の座学では、伊勢国と伊勢市の歴史、伊勢の神宮の内宮、外宮の歴史とその関係と対立、20年に一度の式年遷宮の祭祀と説統行事の内容、皇 とのかかわり、御師の役割、神仏習合などのテーマでそれぞれの講師から意味深い講義を受けた。午後の時間は、体験型実学を通じて、神宮参宮、御神楽経験、熊野三山礼拝、古き良き街歩き、和菓子づくり、和紙体験、祭式作法と服装体験、茶道体験などの実践講義というアクティブラーニングプログラムであった。この多彩なプログラムを通して、五感で日本の神道について深く理解ができた気がする。伊勢の神宮内宮の入口に壮大な鳥居が立ち、私たちは宇治橋の右へ、日常の俗世界から聖なる神の世界を結ぶ懸け橋を渡り、小雨の中で春の花が咲き、漂っている香りと清らかな空気および微風が顔に振れ、心が清まる気がした。周囲に蒼鬱と高大な杉や檜、巖美な山に立つ深い森林と五十鈴川の清らかな水流、石畳にある青々しい苔とカサカサ音を立てる石の道、尊厳な神社建築を見た時に何と素朴で清潔感、神秘感が感じられ、ここにしかない聖なる神の空間に全身が包み込まれた。二拝二拍手一拝のプロセスで、身も心も浄化され、心の寄りところを見つけたように感じ、一生忘れられない貴重な経験であった。

○自分の研究との接点について

私は、これまで環境意識、自然観や森林観、森林に関する意識「民体験、知識」「民態度」「民行動の関係に関する日本と中国の比較研究を行ってきた。中国と日本それぞれの森林資源の状況が異なり、世代間の森林に対する考え方は森林の持続的な利用につながっていくことが再認識できた。神道では、自然の力に対する畏敬の念、自然からの恵みへの感謝の気持ちが人と自然との調和「民共生を大切に、生の自

然を敬愛する心をもった。千年にわたって続けられてきた 20 年に一度の式年遷宮は、200 年以上のヒノキの御用材がたくさん使われており、代々の森林管理の継続で良質な木材生産と育成技術の向上が、心の富を育てることにつながる。現代社会は、人が森といかに関わっていくことが課題である。現存する神宮の森の空間をいかに利用し、子どもの頃から神宮の森に触れる体験を続けられるような、「神宮の森の学校」をつくることがあり得るのではないかと考えた。

○プログラム今後の発展について

感激の「伊勢」と日本スタディプログラムから深く学ぶことができた。このプログラムに参加することで、あらためて自分自身の生活スタイルや生きる方を振りかえって考えてみるきっかけになった。本プロジェクトに対する意見としては、参加できる対象を広げ、世界全国各地の日本人向けの枠も必要だと考えた。また、参加者たちに継続的なフォローアップをすることで、将来の連携や繋がりを維持することができるのではないだろうか。最後に、今回のプログラムに参加する同輩との有難い出会いや、関わっている方々の暖かいお心をつかいに感謝を申し上げ、皆さまに再会できるよう期待している。

与伊势的缘分

○关于神道

来到伊势之前，我对伊势市和伊势神宫的人，事和物等相关的接触很少。因此，我提前在中国知网上查了查与此相关的研究。文献不是很多但还是找到了一些，如“古事记”、“伊势物语”、“式年迁宫”、“日本神道的发展与形成”、“神社建筑的结构形式与文化”、“巡礼文化”、“神话传说与民族信仰”以及“以伊势神宫和出云大社看神道文化”等等相关的论文。对我来说，这些主题都是全新的领域。怎么办！马上就要前往伊势市了，却对该地区和神道知之甚少。在我接受的义务教育和历史教育中，日中战争是中心主题，没有或者很少有涉及到“神道”这一主题。神宫、大社和神社这样的词汇本身，在我的童年和青年时期，就像禁忌一样，没有人谈论它们。因此，我自问自答神道是什么。中国受到了寺庙和佛教的影响，是儒家、道教、禅宗和茶道文化的发源地，这些传统文化在人们日常生活的各个方面都有渗透。例如，在春节会去寺庙参拜，烧纸钱和纸制的衣服给祖先，家里供奉祖先牌位作为神来祭拜的情景也很常见。作为后代，向祖先的灵魂祈祷庇佑，表达感激之情，表现对祖先的尊敬和敬爱之心，这也是一种信仰。中国还有句谚语：“身体发肤受之父母”，爱自己就是爱父母，爱祖父母，爱祖先。我理解到的这种信仰与日本的神道有很多共通之处，与祖先崇拜的信仰一致。

○关于讲座与实践

能够参加为期三周的“伊势”和日本学习项目，让我更深入地了解到伊势的事，物和人。在上午的课堂上，我们从各位老师那里学习了关于伊势国与伊势市的历史、伊势的神宫内宫、外宫的历史及其关系与冲突、还有每二十年举行一次的式年迁宫的祭祀和传统活动等的内容、神宫与皇室的关系、御师的角色与重要性、神佛合习等主题的深刻学习课程。下午的时间是通过体验式见学，如参观参拜神宫、熊野三山、体验神乐仪式，漫步传统建筑群和街道、制作和菓子、体验和纸制作、学习祭祀礼仪和穿着等的实践课程，深入学习。通过这些多样化的课程，通过用五感更深入地了解了日本的神道文化。在伊势神宫内宫的入口处伫立着庄严的鸟居，我们沿着宇治桥的右侧默默通行，这是从日常的世俗界过渡到神圣的神灵界之桥，穿过春雨中盛开的桃花，感受着飘荡在空气中的花香和清新的空气，以及吹拂在脸上的微风，心情变得清爽。周围都是郁郁葱葱的杉树和榎木，高大的山峦起伏，清澈的五十铃川流水，青苔覆盖的石板路和发出嘎吱声的石子路面，当看到庄严的神社建筑时，感觉到的是多么朴素、圣洁和神秘，我整个身心仿佛被包裹在这独一无二的神圣空间中。身边不断传来清脆的拍手之声，那时日本参拜神宫之礼仪，先要鞠躬两次、然后拍手两次，感谢神灵并祈祷，最后再次鞠躬的过程，从这一系列的过程中你能感到自己的身心都被净化了，感觉心静如水，心里有了寄托，每一次巡礼是一生难忘的宝贵经历。

○与我研究的接点

我的研究是关于环境意识、自然观与森林观，森林意识、体验、知识、态度和行为之间关系的日本和中国的比较研究。中国和日本各自的森林资源状况不同，各个世代间对于森林的理解和观念与未来森林的可持续利用至关重要。在神道中讲，要对自然力量的敬畏之情，对自然恩赐的感激之情，人与自然的和谐共生，怀有尊敬自然之心。伊势神宫每二十年举行一次式年迁宫，已经持续了千年，使用的都是200年以上的良材榎木，代代森林管理的延续使得优质木材的生产和培育技术不断提高，并且促进了心灵丰富的培育。当今社会，人与森林的互动成为一个重要课题。我思考着如何利用现存神宫森林空间，创建一个“神宫森林学校”，让孩子们从小就能接触神宫的森林，通过实际体验让信仰的种子发芽。

○项目未来的发展

通过这次令人难忘的“伊势”和日本研究项目，我对日本文化和神道的理解又深入了很多。参加这个项目使

我重新审视了自己的生活方式和生活态度。关于这个项目的建议，我认为应该扩大募集对象，不仅是外国参加者，还有必要像世界各地的日本人提供这样的机会。在国际化的背景下，不同文化的互相理解和学习，促进人与人之间的深度交流与和平相处。此外，通过对参与者进行持续跟进，或许可以保持未来更多的合作与联系。最后，我衷心的感谢与我一起参加这次项目的同伴们以及相关人士的热情款待，期待着与大家再次相聚。